

駒ヶ根市文化財

名称	駒ヶ根市の石仏
種別	民俗・芸能
所在地	市内各地

石仏の定義は非常に難しい。平成9年(1997)に駒ヶ根市教育委員会が発刊した『駒ヶ根市の石造文化財』では、「石造文化財」を「信仰と深く関わる物」と「そうでない物」(記念碑や句碑・歌碑など)とに分類し、前者を広い意味での「石仏」としている。ここでは「石仏」の内、民間信仰として一般的に見られる、馬頭観世音(ばとうかんぜおん)と道祖神、庚申信仰に関わるものについて触れることとする。



中沢大曾倉 諏訪神社
馬頭観音安永二年 (1773)



東伊那栗林栖林寺境内
双体馬頭観音
宝暦十一年 (1761)



中沢本曾倉 馬頭観音
天保九年 (1838)

1) 馬頭観音

馬頭観音は石仏の中では、最も数が多くなじみのあるものである。

馬頭観音はもともとは忿怒(ふんぬ)(ひどく怒ること)の相をし、馬頭大士・馬頭明王とも呼ばれ、生死の大海を渡って一切の障害を打ち砕く観音様だと云われている。

馬頭像は、一面二臂(ひ・び)(手のこと)・一面四臂・三面三眼八臂などがあって、いずれも頭上に「馬頭冠」をいただき、「馬口印」を結んでいる。

日本においてはこの「馬頭冠」からの連想で、馬の安全を祈ったり、特定の死んだ馬の供養として、さらに墓標的なものとして造られるようになったものである。市内に残る像形のものほとんどがこの種のもので、像の表情は温厚なものである。

馬頭観音には像形のもの文字碑のものがあり、『駒ヶ根市の石造文化財』には、1,093体が所収されているが、そのうち、約8割が文字碑のみのものである。像形のもの、一面二臂の温厚な顔を持つものがほとんどで、頭上に「馬頭冠」を頂いているので、他の石仏との判別はた

駒ヶ根市文化財

易いかと思われる。

文字碑のものにも「馬頭冠」が彫られたものがある。中には二頭の馬の供養のためか二つあるものもある。

像形のもの、明治と昭和に一基ずつあるだけで、圧倒的に江戸時代のものである。また、中沢地区に像形のものも多く見られることも注目すべきことである。

文字碑に刻まれる主銘文は、「馬頭観世音」が最も多いが、「馬頭観世音大士」・「馬頭観音」のほかにもさまざまな表現が見られる。馬頭観音は路傍に建立されることが多いので、「道標」が併記されているものもある。

市内で最も古いものは、赤穂上赤須にある天和 2 年(1682)のもの(①)であり、現在までに確認されたものの中では、上伊那での最古のものと思われる。次が中沢本曾倉にある宝永 3 年(1706)文字碑である。新しいものでは、昭和年代以後のものも見られる。



① 赤穂上赤須馬頭観音
天和二年 (1682)
市内最古

2) 道祖神

路傍にひっそりとたたずむ道祖神は、一般によく知られた石仏であるが複雑な性格を持った神さまである。

中国の古代信仰に、旅行の守護神として「道祖神」があり、朝鮮の民間信仰にも類似したものがあつたという。これらの信仰が日本に伝わって道祖神信仰が形づくられたものである。

悪魔の侵入を防ぐ神さまとして、村境に建てられるのが一般的であるが、「厄除けの神」・「行疫神」・「作の神」・「道の神」・旅人を護る「旅行の神」・「縁結びの神」・「子授けの神」・「耳の神」などのほかに、安曇野地方によく見られる「夫婦和合の神」・「性神」としての性格など色々な性格を持っている。

故に呼び名も色々ある。「どうそじん」・「さいのかみ・せえのかみ」・「どうろくじん」などがあり、みな同一の神だとされている。「さい・さえ」は「塞」のことで、「ふせぐ」の意味・外からの敵の侵入を防ぐものである。このようなことから「流行病」から護る意味の神なども生まれたものであろう。

「厄除けの神」と結び付いたものとして、上伊那地方では厄年の行事が行われている。厄年(女、十九・三十三歳、男、二十五・四十二歳)の者が、「厄を落とす」ためとして、節分の夜に食事に使っていた茶碗に年の数だけお金(代わりに大根の輪切り)を入れて、道祖神にたたきつけて振り返らずに帰ってくるという風習で、近年まであちこちで行われていた。

道祖神には、文字碑と像形、自然石を置いただけの奇石道祖神がある。『駒ヶ根市の石造文化財』には、約 110 基が所収されている。うち文字碑は 83 基、像形のもの 22 基、奇石道祖



② 東伊那伊那耕地
伊那森神社境内
双体道祖神

駒ヶ根市文化財

神は5基である。

文字は「道祖神」と刻むものがほとんどで、他に「塞神」・「道陸神」・「道福神」などがある。文字碑で最も古いものは、中沢菅沼と下割にある延享5年(1748)のものである。

像形のもので、年代のわかるものは10基である。平成年代建立のものを除けば、江戸時代のもものがほとんどで、年代の不明のものも、大方江戸時代から明治の初めにかけてのものと考えられる。東伊那・中沢地区に像形のものが多い。単体像のものは2基で、後は双体像である。(2)このうち中沢下割にあるものは小連れ道祖神だとされている。

像形のもので最も古いものは、中沢本曾倉にある享保2年(1717)のもの(3)、次いで赤穂市場割にある享保15年(1730)のものである。この二つは文字碑のものを含めても最も古いものである。奇石道祖神は昔からの言い伝えによるものであるが、地域の人々によって大切に護られている。



③中沢本曾倉協議所
双体道祖神享保二年
(1717) 市内最古

3) 庚申塔

庚申(こうしん)信仰とは十干の庚(かのえ)と十二支の申(さる)が結びついた、六十回に一回廻って来る日や年に行われる民間信仰である。このように干支(えと)の年や日に祀る行事・信仰には、他に甲子(こうし)信仰や己巳(きし)待ちがある。

庚申信仰は古く中国の道教系の教えに基づいて原型ができ、日本に伝来して、仏教的要素も加味され成立したものだと言われている。それは六十回に一度廻って来る「庚申の日」、人体にいる三尸(さんし)の虫が体内から抜け出して、天帝にその人の罪過を報告する。天帝はそれによってその人の死期を早めるというもので、庚申の日は一夜を眠らずに過ごして身を慎む「守庚申」の行事である。

7世紀末から8世紀には日本に伝わり、8世紀末には宮廷において庚申待ち(こうしんまち)の行事が行われとされている。その後武士の間に広がり、江戸時代には庶民の間にも広がった。最も盛んになったのは元禄から享保時代(17世紀末から18世紀初め)とされている。以後この信仰を裏付けるかのように「庚申塔」が建てられるようになってくる。

日本における庚申信仰の広がりには二つの系統がある。日本で古くから信仰されて「猿」と「申」を結びつけた「猿田彦大神」を主尊とする神道系と本尊と帝釈天を「天帝」と呼び、また庚申の夜三尸の虫が天帝の所へ悪事を告げることから、天帝の正体を取替えて帝釈天の使者である「青面金剛(しょうめんこんごう)」を本尊とした仏教系とがある。

一般庶民の間に広まった江戸時代には、江戸や大阪では庚申の夜に庚申堂や宿屋で芸を見たり、世間話をしたりして夜を過ごした。農村では娯楽とともに「農神」としても発達していった。宗教的にも圧迫されていた農民は、娯楽と信仰とを兼ねる事が出来る庚申に、自分たちの



④北割一区青面金
剛元禄四年(1691)
市内最古

駒ヶ根市文化財

ささやかな夢を託し、国土安全・平穩無事・五穀豊穡・家門繁栄などなど、自分たちの守り神として広く信仰されたのである。

このように庚申信仰は広く信じられ、市内にも多くの庚申塔が建てられている。『駒ヶ根市の石造文化財』には、馬頭観音に次いで多い 419 基が所収されている。昭和 55 年(1980)の庚申の年には各地に庚申塔が建てられ、盛大にお祀りが行われた。個人での造立を含めれば、100 基余の庚申塔が建てられた。

庚申塔は幕末頃から庚申の年に建てられるようになって来るが、以前は庚申年以外の年の造立も見られる。これは「年」でなく、「日」(庚申日)の観念が強かったものである。

当地方では、庚申の主尊は青面金剛が主体であったようである。庚申の夜に集まる「庚申講」が各集落にあり、青面金剛像の掛け軸の前に供え物をし、真言(呪文)を唱え、その後飲食をし、夜遅くまで世間話をして解散するのが習わしであった。

庚申を祀る庚申塔には、文字碑と主に青面金剛像を彫り込んだ像形のものがある。文字碑のものが圧倒的に多く、像形のは 55 基である。像形のは文化 13 年(1816)を最後とし、それ以後の造立は見られない。このことから年代不明のものはほとんどが江戸時代のものと考えられる。

庚申塔の初見は、赤穂北割一区にある元禄 4 年(1691)(④)、次いで赤穂上穂にある元禄 8 年(1695)(⑤)で、ともに青面金剛像である。文字碑では中沢本曾倉にある元禄 10 年(1697)(⑥)のものである。珍しいものとしては東伊那栗林に「除三戸之罪」とした享保 21 年(1736)文字碑がある。「三戸(さんこ)」は「三戸(さんし)」のことで、庚申塔であるとされている。像形に見られる青面金剛や神道系の猿田彦を刻むものはない。

像形のもの 55 基はすべて青面金剛の像である。青面金剛は、四臂三眼、二鬼をふまえ、二童子と四夜叉を従えた「畏怖」すべき像だとされているが、市内のものは、四臂と六臂のものがほとんどで、もともと四臂のものが六臂になったとされている。

四臂のものに古い時代のものが多く見られる。このことについては、「昔は人手があるとその家は豊かになると考えていたことの表れ」だとされている。合掌した手の、他の手には日・月奉持、宝珠、索、弓、矢、蛇、錫杖等を持っている。像の上には、日と月や梵字を刻むものもある。像の下には、三猿を刻み両脇に鶏を従えるものもある。猿は「猿田彦」との関連があるとされている。鶏についてははっきりしないが、夜が早くあけるようにとのことだとも云われている。



⑤上穂栄町青面金剛元禄八年(1695)



⑥中沢本曾倉 御坂山神社参道庚申塔元禄十年(1697) 市内最古の文字